

宮城県栗原市栗駒猿飛来

鳥矢ヶ崎古墳群青雲神社地点 発掘調査報告

辻 秀人・佐藤 由浩・森 千可子・相川ひとみ
石山 朋美・梅宮 崇成・木村 智・小丸 雄大
白銀沙也佳・鈴木 舞香・野村 真吾・吉原 夏海

調 査 体 制

調査期間 第1次調査 平成27年3月12日～23日、3月27日～31日

第2次調査 平成28年3月3日～22日、3月26日～28日

調査主体 東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナール

調査担当 東北学院大学文学部 教授 辻 秀人

調 査 員

第1次調査

佐々木拓哉・横田竜巳（大学院博士課程前期2年）

木村圭佑・森 千可子・岸 知弘・芦野 悟・阿部大樹・佐々木雪乃
渋谷若菜・東海林裕也・菅原里奈・新保摩実・西川悠也・廣瀬拓磨
結城彩花（4年生）

相川ひとみ・阿部悠大・泉澤まい・笠原大暉・鈴木里奈・野呂夕奈
星 あゆみ・村木 翔（3年生）

石山朋美・梅宮崇成・木村 智・小丸雄大・白銀沙也佳・鈴木舞香
野村真吾・吉原夏海（2年生）

佐藤由浩・山口貴久（外部参加者）

第2次調査

佐藤由浩・森千可子（大学院博士課程前期1年）

相川ひとみ・村木 翔（4年生）

石山朋美・梅宮崇成・木村 智・小丸雄大・白銀沙也佳・鈴木舞香
野村真吾・吉原夏海（3年生）

岡本莉奈・窪田磨実・斎藤千晶・佐伯鉄太郎・酒井 瞳・清野寛仁
鈴木千賀・平 大貴・高橋多津美・結城 悟・横山 舞（2年生）

高橋伶奈（1年生）

調査協力 栗原市教育委員会 猿飛来コミュニティセンター

鳥矢ヶ崎史跡公園保存会

千葉長彦、大場亜弥、安達訓仁、工藤 健、佐藤 茂（敬称略）

例 言

- 1、本書は平成27年3月12日～3月23日、3月27日～31日、平成28年3月3日～22日、3月26日～28日に実施した宮城県栗原市栗駒猿飛来に所在する鳥矢ヶ崎古墳群青雲神社地点の第1次発掘調査と第2次発掘調査の成果をまとめたものである。
- 2、発掘調査は東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナールのゼミ活動の一環として実施したものである。
- 3、調査は東北学院大学文学部教授辻秀人が担当した。調査の主な参加者は大学院、文学部考古学ゼミナール所属学生、所属予定の学生である。
- 4、出土遺物、作成図面の整理は東北学院大学文学部歴史学科考古学ゼミナール所属の3年生が中心となって実施した。
- 5、本書の編集は辻秀人が担当し、執筆は参加者が分担した。各項目の執筆者は文末に記した。報告の記載は各執筆の原稿に辻が加筆訂正を行ったものである。従って最終的な文責は辻にある。
- 6、本書に掲載した図面の高さ表示はすべて海拔、北はすべて真北を示す。
- 7、本書に掲載した平面図の位置は、便宜的に局地座標系により表示した。局地座標のX,Y座標は調査にあたって設置した基準点T1（公共座標X=-131889.046 Y=14885.611）をX=100.00、Y=100.00とした。X軸は真南北方向、Y軸は真東西方向である。
- 8、本書に掲載する鳥矢ヶ崎古墳群航空写真はすべて工藤健氏が所有するものである。工藤氏のご厚意により本書に掲載させていただいた。
- 9、鳥矢ヶ崎古墳群に関わるこれまでに刊行された報告書は以下の通りである。
- 10、調査した墳丘をこれまで1、2号墳と呼称してきたが、今年度の調査で古墳ではないと判断されたので、本報告から墳丘を塚と呼称する。

鳥矢ヶ崎古墳群関連報告書

栗駒町教育委員会 1972 『宮城県栗原郡栗駒町鳥矢ヶ崎古墳調査概要』 昭和四十六年度栗駒町埋蔵文化財報告

辻 秀人他 2015年 「宮城県栗原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎古墳群測量調査報告」 『東北学院大学論集 歴史と文化』 第53号

辻 秀人他 2016年 「宮城県栗原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎古墳群青雲神社地点第1次発掘調査報告」 『東北学院大学論集 歴史と文化』 第54号

第1章 調査に至る経過

鳥矢ヶ崎古墳群古墳の存在は明治時代から知られており、昭和46年には、東北学院大学加藤孝教授、東北大学高橋富雄教授を中心とする栗駒町鳥矢ヶ崎古墳群調査団によって発掘調査が実施された。調査の結果、1号墳からは東北北部に分布する末期古墳群に共通する石室かと思われる埋葬部が、2号墳からは地表下に埋納された木棺痕跡が発見され、鳥矢ヶ崎古墳群には北の要素と中央の要素が混在していると考えられた。また、鈿帯金具一式等が出土し、被葬者には当時の律令国家の役人であった人物が埋葬されていることが判明し、当地が伊治城で反乱をおこした伊治公砦麻呂の一族が基盤とした地域と見られることもあわせて、東北古代史を考える上で重要な知見をもたらすこととなった（栗駒町教委 1972）。

また、東北学院大学辻ゼミナールは2012年以降3年間にわたって測量調査を実施し、39基にのぼる古墳群全体の測量図を作成し、古墳群全体の姿を明らかにした（辻他2015）。この結果、鳥矢ヶ崎古墳群が全体の姿が良好に保存されているきわめて貴重な古墳群であることが明瞭となった。また、安達訓仁氏による出土遺物の再検討により、（安達2015）8世紀後半代にA1・A2号墳が位置づけられることが明らかにされた。鳥矢ヶ崎古墳群は伊治城が造営され、宝亀十一年の伊治公砦麻呂の乱が引き起こされた頃に営まれた古墳群と理解される。伊治公一族が基盤とした伊治城に近いこの地域には他にこの時期の有力な古墳群は他になく、鳥矢ヶ崎古墳群こそが伊治公一族の墓所であったと考えられる。鳥矢ヶ崎古墳群は東北古代史を考える上できわめて重要な意味を持つといえよう。

ところで、鳥矢ヶ崎古墳群1号墳には北の要素が、2号墳には中央の要素があると指摘されている（栗駒町教委 1972）が、残念ながら1号墳の石室や、2号墳の木棺の構造が明瞭ではない。鳥矢ヶ崎古墳群発掘調査以後東北北部にも墳丘下に木棺が埋納された事例が多数確認されており、木棺の存在だけではその性格を論ずることができない状況にある。従って鳥矢ヶ崎古墳群で用いられている木棺がどのようなものかを知ることがその性格を考えるために必要であることが痛感された。

周知のように鳥矢ヶ崎古墳群は県指定史跡であり、更なる発掘調査を実施することはできない。東北学院大学辻ゼミナールでは測量調査終了後、鳥矢ヶ崎古墳群の埋葬部の構造を把握するため、指定地外にある新たに発見された2基とその後発見された1基を加えて合計3基の調査をすることになった。2015年には1号墳（塚）を発掘調査し、今年度は2号墳（塚）、3号墳（塚）の測量発掘調査をした。調査にあたり、土地を所有する青雲神社宮司佐藤伸成氏、総代菅原 勁氏に調査の許可をお願いし、ご快諾を得た。

引用文献

- 栗駒町教育委員会 1972 『宮城県栗原郡栗駒町鳥矢ヶ崎古墳調査概要』 昭和四十六年度栗駒町埋蔵文化財報告
- 安達訓仁 2015年 「第4章 鳥矢ヶ崎古墳 A1・A2号墳出土遺物について」 『宮城県栗原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎古墳群測量調査報告』 『東北学院大学論集 歴史と文化』 第53号
- 辻 秀人他 2015年 「宮城県栗原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎古墳群測量調査報告」 『東北学院大学論集 歴史と文化』 第53号
- 辻 秀人他 2016年 「宮城県栗原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎古墳群青雲神社地点第1次発掘調査報告」 『東北学院大学論集 歴史と文化』 第54号



写真1 1号塚（手前）と2号塚（奥）



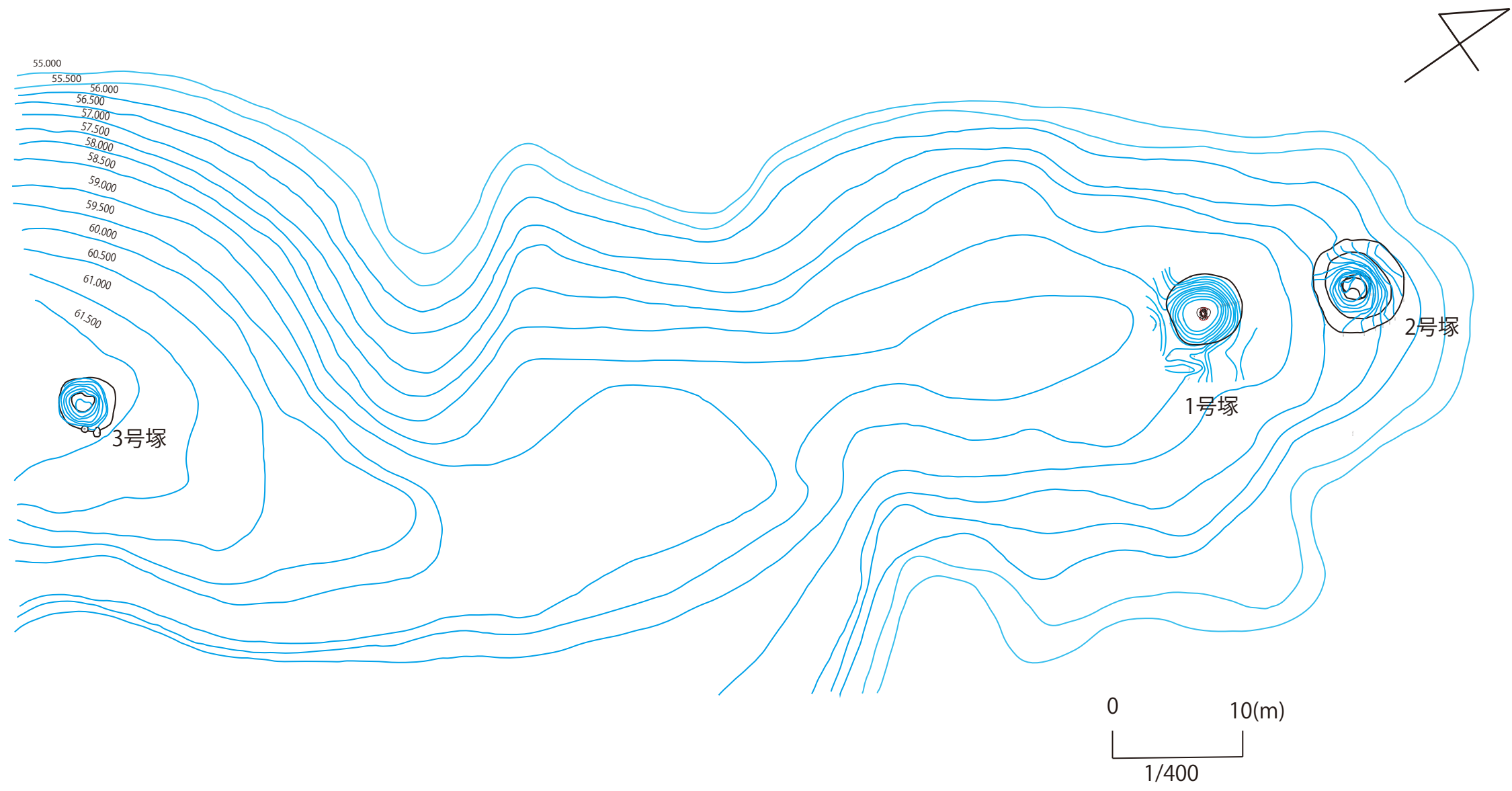
写真2 1号塚（調査前）



写真3 2号塚（調査前）



写真4 3号塚（調査前）

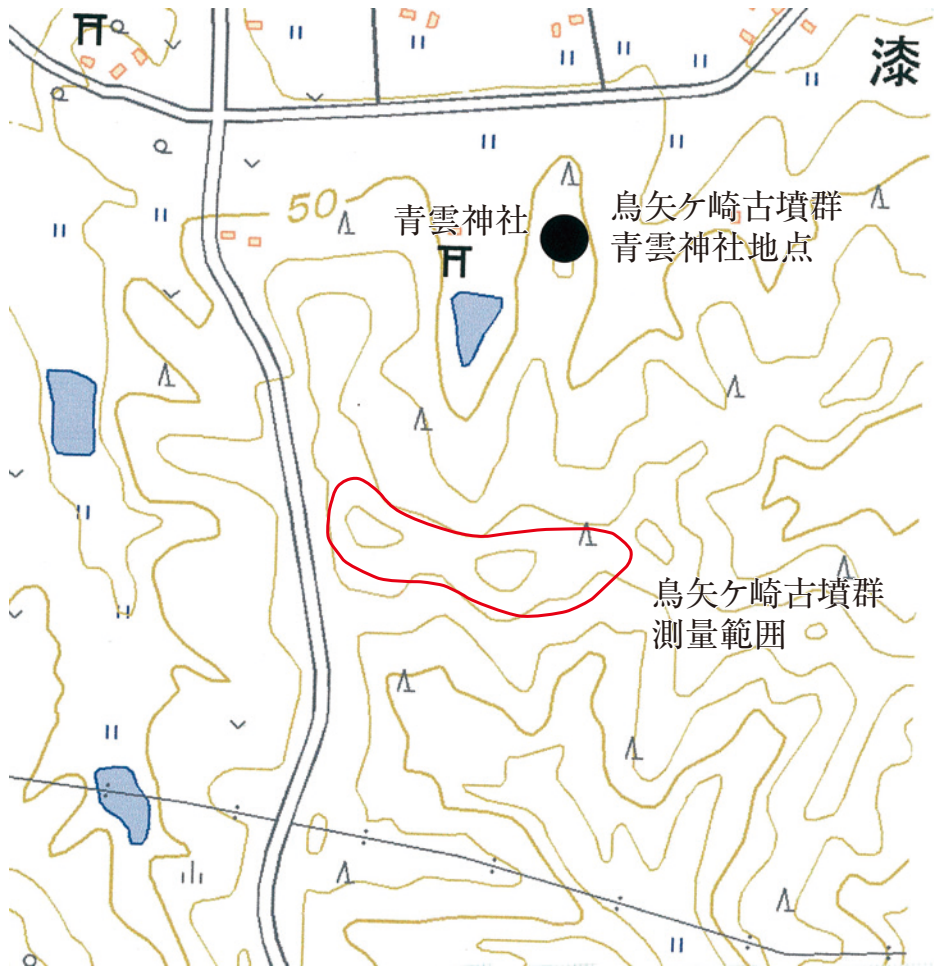


第3図 青雲神社地点周囲の地形と塚の分布

第2章 遺跡の環境

第1節 古墳の立地

鳥矢ヶ崎古墳群は、宮城県栗原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎に所在する。奥羽山脈から派生する南東に延びる丘陵の痩せ尾根上から南斜面にかけて総数39基が分布する。県史跡に指定されている。鳥矢ヶ崎古墳群の西端、栗駒山を望むことができる地点から丘陵は枝分かれし、尾根線が北にも延びる。北に延びる尾根線上に史跡指定範囲外に3つの高まりが連なる地点がある。この墳丘状の高まりの性格は明らかではない。また、同じく鳥矢ヶ崎古墳群B地点の中程で枝分かれし、北に尾根線が延びて青雲神社の西側に至る。この青雲神社西側に延びる尾根線の先端近くに2基の墳丘が確認された。この地点を鳥矢ヶ崎古墳群青雲神社地点と呼び、新たに発見した1基を加え、計3基の測量、発掘調査を実施した。所在地は原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎2-1である。



第1図 鳥矢ヶ崎古墳群古墳群の位置

第2節 歴史的環境

鳥矢ヶ崎古墳群が所在する現在の栗原市域は、古墳時代から古代にかけて東北北部と東北南部の文化の境界にあたり、歴史的に様々な事象が起きたことが知られている。

古墳時代には、土師器を使い、古墳を築く東北南部の文化（古墳時代社会）と狩猟、採集を生業とする北海道の文化と共通する続縄文文化とが境を接していた。

宮城県栗原市築館城生野に所在する国指定史跡伊治城跡では、2条のL字形に伸びる溝が検出され、堆積土中から大量の塩釜式土師器と北大I式の深鉢が出土し、古墳時代前期に位置づけられた（築館町教育委員会 1992）。2条の溝を組み合わせて豪族居館との理解もあるが、必ずしも明瞭ではない。ただ、古墳時代前期にこの地に古墳文化を持つ人々が暮らし、続縄文文化の文物を入手できる状況にあったと見ることができる。

また、平成26年には伊治城跡の南西約500mの位置にある入の沢遺跡の大規模な発掘調査が実施され、大規模な堀と材木堀で囲まれた古墳時代前期の拠点的な集落の存在が明らかにされた（村上 2015 宮城県教委 2014）。入の沢遺跡の西側の尾根上にある大仏古墳群は入の沢遺跡との関係が考えられている。伊治城跡の北西約3kmにある長者原遺跡の存在とあわせ、この地域には古墳時代前期において古墳文化を持つ集落の広がりが見られ、北の続縄文文化と相対していた様相を確認することができる。入の沢遺跡の大規模な防御施設が存在を考えると、古墳時代前期において古墳時代社会と続縄文社会との軋轢がこの地にあった可能性があるのだろう。

古墳時代中期～後期はこの地の遺跡は明瞭ではない。奈良時代にいたり、再び大規模な遺跡が確認されるようになる。

伊治城は、東西700m、南北900mの範囲を土塁と大溝で区画し、内部に政庁を設ける大規模な施設で、767（神護景雲元）年に律令国家の東北北部への進出の足がかりとして築かれた。伊治城建設に先だって関東の人々の移民が行われたことが伊治城の南約2kmの御駒堂遺跡で確認されている（宮城県教委 2014）。また、墳墓では姉齒横穴群、大沢横穴群が営まれた。横穴として簡略化され新しい段階のものである。在地の墓制ではなく、移民と関係する可能性が高い。両横穴群は内陸では最北の横穴群である。

鳥矢ヶ崎古墳群が営まれた奈良時代には、南東約6kmにある伊治城周辺で関東からの移民、新たな墓制の開始など伊治城造営に関わる大きな変化が進行していた。鳥矢ヶ崎古墳群を営んだ人々は歴史的な大変動に直面した。鳥矢ヶ崎古墳群には、東北北部の円墳で構成される古墳群と共通する様相を見て取ることができる。小規模な石室の存在も含めて、いわゆる末期古墳群の範疇で理解することができる。

鳥矢ヶ崎古墳群を営んだ人々は、大きくみれば東北北部の蝦夷と呼ばれた人々と共通する文化の中であり、この地域の在地の勢力が営んだものと見られる。しかし出土遺物には北の末期古墳群と共通する要素とともに律令国家と関係の深い文物もあり、国家と在地勢力との緊張関係の中でこの地の人々がとった対応を示している。

引用、参考文献

- 栗駒町教育委員会 1972 『宮城県栗原郡栗駒町鳥矢ヶ崎古墳調査概要』 昭和四十六年度栗駒町埋蔵文化財報告
- 築館町教育委員会 1992年 『伊治城遺跡—平成3年発掘調査報告書一』 築館町文化財調査報告書第5集
- 宮城県教育委員会 2014年 「入の沢遺跡」『平成26年度遺跡調査成果発表会発表要旨』 宮城県考古学会
- 宮城県教育委員会 2014年 「御駒堂遺跡」『平成26年度遺跡調査成果発表会発表要旨』 宮城県考古学会
- 安達訓仁 2015年 「第4章 鳥矢ヶ崎古墳 A1・A2号墳出土遺物について」『宮城県栗原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎古墳群測量調査報告』 『東北学院大学論集 歴史と文化』 第53号
- 村上裕次 2015年 「入の沢遺跡の調査成果」『東北学院大学アジア流域文化研究所公開 シンポジウム古代倭国北緑の軌轢と交流栗原市入の沢遺跡で何が起きたか資料集』



写真5 鳥矢ヶ崎古墳群青雲神社地点1号塚調査風景



第2図 鳥矢ヶ崎古墳群および周辺遺跡位置図 (古墳時代～古代)

第3章 測量・発掘調査成果

第1節 測量

1. 測量の方法

鳥矢ヶ崎青雲神社地点の測量調査を行うにあたって、次のような方法で原図を作成することとした。

- ・原図縮尺 墳丘分布範囲 1/20
- ・等高線 墳丘分布範囲 25 cm ごとに記入し、1 m ごとに太線とする。
- ・作図方法 T1、T2 を基準点とし、トータルステーションを用いて XY 座標を測定し、測量基準点を作成した。なお、必要に応じて併合トラバースを実施し、測量基準点の正確性を確認している。各測量基準点から平板を用いて作図した。作図に当たっては墳端線、傾斜変換線を先に記入し、後に等高線を作成した。等高線は標高により作成した。

測量原点は、2012 年に栗原技研に依頼して、GPS 測量により設置した、基準点を用いる。その成果は以下のとおりである。

T1 X=-131889.046 m Y=14885.611 m

標高 67.765 m

T2 X=-131860.115 m Y=14925.241

標高 66.968 m

注 この成果は 2012 年 2 月 27 日に観測したものである。東日本大震災前、平成 20 年 6 月 14 日発生岩手宮城内陸地震後のデータと比較すると X 軸で、1.29 m 南に、Y 軸で 2.875 m 東に移動しており、東日本大震災と岩手宮城内陸地震のいずれよりも前のデータと比較すると、X 軸で 1.18 m 南に、Y 軸で 2.729 m 東に移動している。

T1、T2 の座標データは公共座標で表示されている、実際の作図作業にあたっては、公共座標は数値が大きすぎ、扱いにくいので、T1 を X=100.00、Y=100.00 とし、真南北方向を X 軸真東西方向を Y 軸とする局地座標系を用いた。本報告掲載図面の表示も局地座標系を用いた。局地座標 XY それぞれの数値から 100.00 を減じた後 T1 のそれぞれの数値に加えることで、公共座標に転換可能である。

引用文献

辻 秀人他 2015 年 「宮城県栗原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎古墳群測量調査報告」『東北学院大学論集 歴史と文化』第 53 号

第2節 発掘調査成果

1. 1号塚

1号塚は、南北に延びる尾根線上の平坦面に築かれた円形の塚である。直径約6m、高さ約1.2mあり、第1次調査では墳丘上面とそれ以下の掘り下げを行い、第2次調査では墳丘の掘り下げの続きを行った。

第1次調査

第1次調査では、周濠の有無の確認や、古墳墳丘・周濠外の様子を観察するためトレンチ設定を行い、表土（腐植土）を除去したのち墳丘を30cm幅の畦を十字に残して四分劃し、北側から逆時計周りにa、b、c、d区とした。

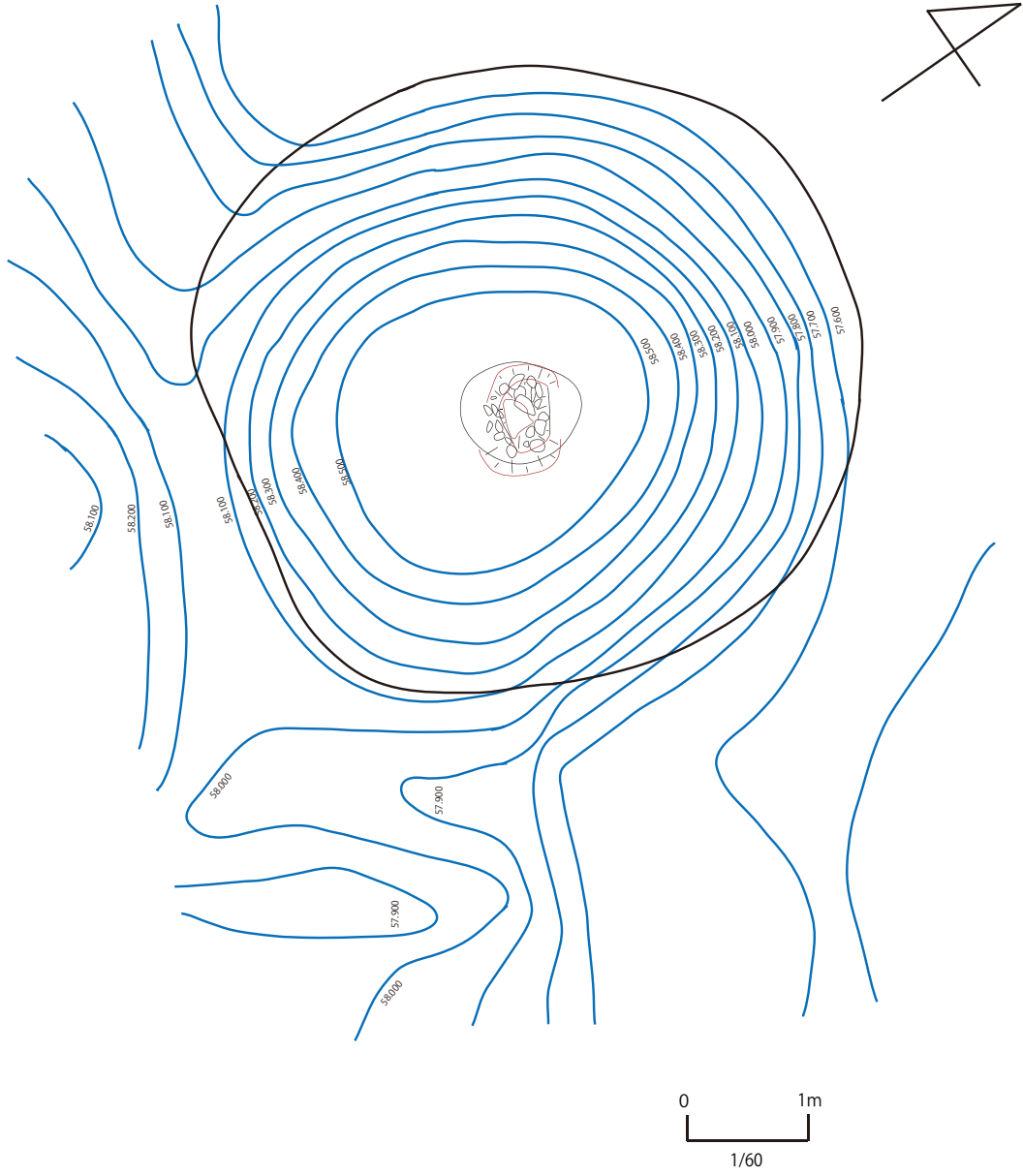
墳丘上面を検出したところ、1号塚の墳丘は下半が地山整形、上半が墳丘外周を削った土を盛り上げて作り出されていることが判明した。墳丘外周は削られているため浅いくぼみがめぐっていたが、明確な掘り込みは認められず、周溝とは理解しなかった。墳頂部分には河原石が分布し、河原石が詰め込まれたウレタン製の箱が埋め込まれていた。箱を除去し、周囲を精査したところ、箱の下にピット状のくぼみがあること、それを囲むように石が分布していることが確認できた。墳丘上面を掘り広げたところ、中央付近に長軸10cm前後の川原石が散在していること、中央部には円形に黒色土が広がることがわかった。円形の黒色土を掘り下げると直径50cm程の穴があり、その周囲に小型の川原石が円形に組み込まれていて、周囲に散在する川原石に混じって陶器破片が出土した。穴を囲む石はやや動かされているようだが、本来は円形の石組みであったと見られた。

墳丘の掘り下げを行ったところ、墳丘中央部のa～d区にわたって黄褐色の土が分布している様子が観察された。石組み遺構に壊されている部分があるものの、黄色土の分布が長方形を呈することが判明し（写真6）、木棺の埋納に伴う陥没坑の可能性が考えられた。

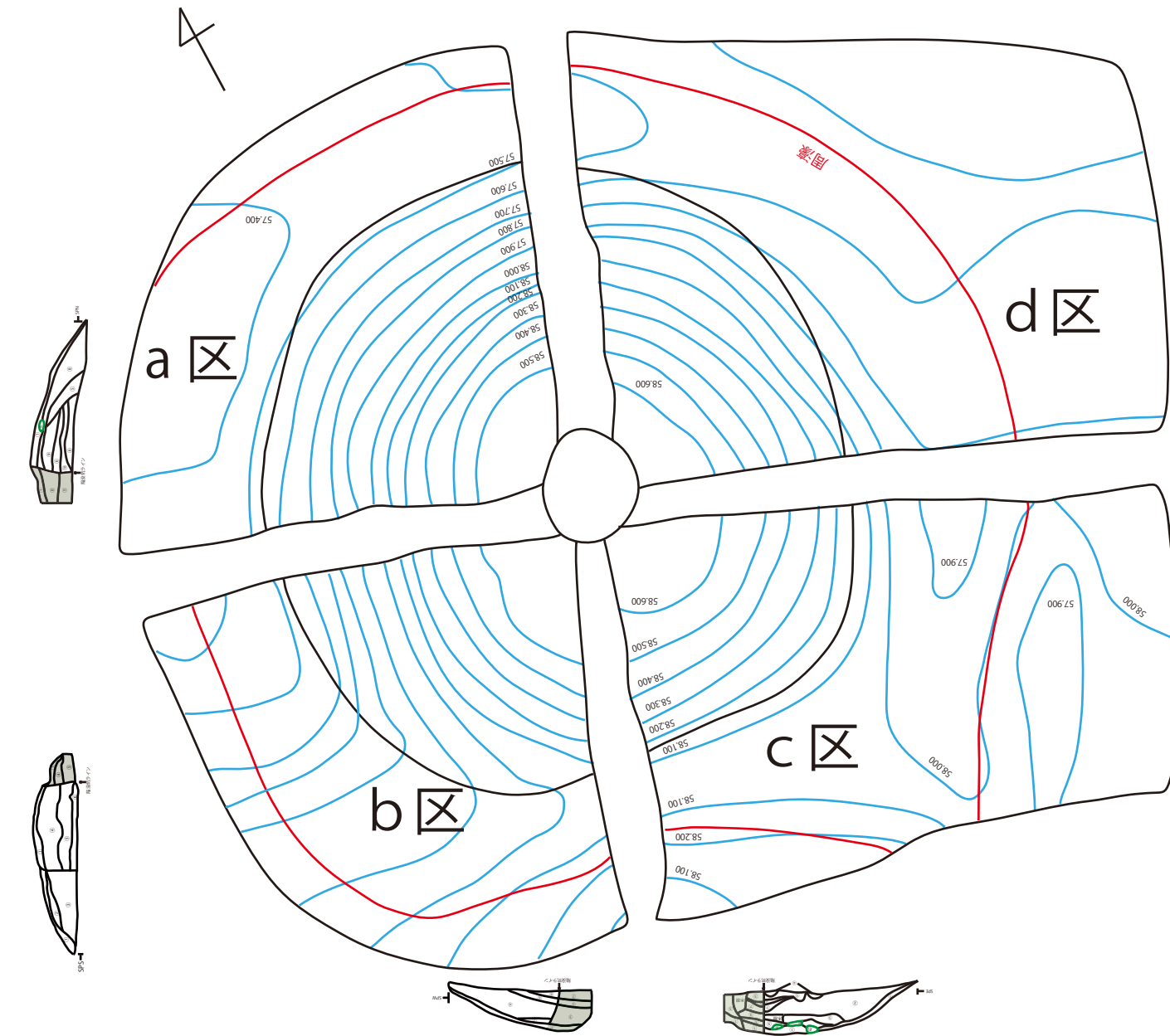
陥没坑全体の姿を確認するため、土層観察のために残しておいた畦を石組み部分を除いて除去し、精査した。陥没坑内には白色土があり、外側には旧表土と見られる黒色土が広がっていた。墳丘土層断面では墳丘の土に明らかなズレが生じており、墳丘正面まで陥没坑が達している様子が観察された。陥没坑は南北2.2m東西0.95mを測り、埋葬施設の陥没坑と見ることが可能であった。

陥没坑東半分を掘り下げ、埋葬部を探索したが、埋葬部には至らなかった。

（野呂夕奈、星あゆみ、鈴木里奈、梅宮崇成）



第4図 1号塚墳丘上面全体図



(1/60)

1号墳C区西壁					
層色	粘性	しまり	粒度	備考	
① Hue 7.5YR 黒褐3/2	弱い	なし	なし	表土	
② Hue 7.5YR 明褐5/8	やや強い	弱い	なし	墳丘形成土	
③ Hue 7.5YR 褐4/4	やや強い	強い	粘土	墳丘形成土	
④ Hue 7.5YR 褐4/6	強い	強い	粘土	墳丘形成土	
⑤ Hue 10YR 黄褐5/8	やや強い	やや強い	粘土	墳丘形成土	
⑥ Hue 10YR 褐4/6	やや強い	やや強い	粘土	墳丘形成土	

1号墳d区南壁					
層色	粘性	しまり	粒度	備考	
① Hue 10YR 黒褐2/3	弱い	中	シルト	表土	
② Hue 10YR 褐4/6	弱い	中	シルト	墳丘形成土	
③ Hue 7.5YR 明褐5/6	弱い	中	シルト	墳丘形成土	
④ Hue 10YR 黄褐5/6	弱い	中	シルト	墳丘形成土	
⑤ Hue 10YR 黄褐4/4	弱い	中	シルト	2.5YR 4/1 黄灰礫小粒、2%混入	
⑥ Hue 2.5YR オリーブ褐4/6	弱い	中	シルト	墳丘形成土	
⑦ Hue 7.5YR 明褐5/6	弱い	中	シルト	墳丘形成土	
⑧ Hue 10YR 赤い黄褐 5/4	弱い	中	シルト	墳丘形成土	

d区西・南壁断面図					
層色	粘性	しまり	粒度	備考	
① Hue 10YR 黒褐3/2	弱い	中	シルト	表土	
② Hue 10YR 黄褐8/5	弱い	中	やや粘質なシルト	墳丘形成土	
③ Hue 10YR 黄褐6/3	弱い	中	シルト	墳丘形成土	
④ Hue 10YR 黒2/1	やや強い	中	やや粘質なシルト	旧表土	
⑤ Hue 10YR 褐4/6	やや強い	中	粘土	墳丘形成土	
⑥ Hue 7.5YR 明褐5/6	強い	中	粘土	墳丘形成土	
⑦ Hue 10YR 黄褐5/8	やや強い	中	やや粘質なシルト	墳丘形成土	
⑧ Hue 7.5YR 明褐5/8	やや強い	中	やや粘質なシルト	墳丘形成土	
⑨ Hue 10YR 黄褐5/6	弱い	中	やや粘質なシルト	墳丘形成土	

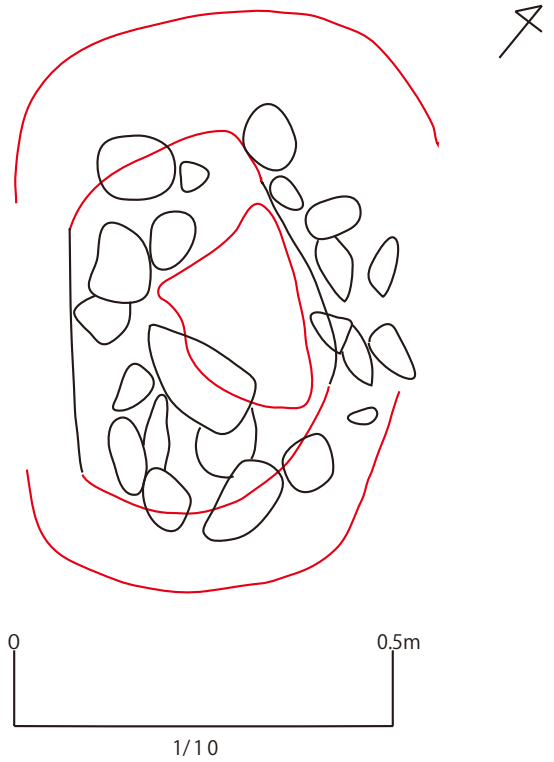
第5図 1号塚掘下げ全体図



写真6 1号塚上面写真



写真7 1号塚上面石組遺構



第6図 石組み遺構実測図

出土遺物

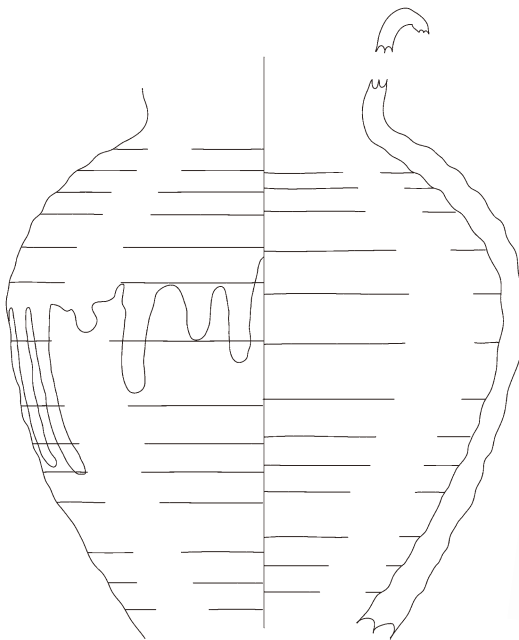
陶器

塚上面から出土した陶器破片はすべて同一個体だった。復元したところ、壺形陶器で、頸部から体部にかけて約1/3が残存していた。底部はなく、口縁部は意識的に打ち欠かれている。

全体にロクロ成形で、後円部から胴半ばにかけて灰釉がかけられ、緑色を呈している。焼成は良好で釉薬のかかっていない部分は黒褐色を呈する。体部全体に縦方向の調整の痕跡が見られる。八重樫忠郎氏から渥美焼であるとのこと教示を得た。出土状況や口縁部が打ち欠かれているなどの特徴から、経筒の外容器である可能性が高い。年代は、口縁部の特徴から渥美焼の編年（愛知県 2012）の2a期、12世紀末と推測される。

渥美焼きは、宮城県、福島県、岩手県で出土例があり、岩手県平泉遺跡群で最も多く発見されている。本例は1号塚上面に営まれた経塚と奥州藤原氏との関係がどのようなものであるか考える手がかりになる可能性がある。

（森 千可子）



第7図 渥美焼壺実測図（1/3）



写真8 渥美焼壺写真

第2次調査

墳丘の掘り下げを行ったところ、2つの下層遺構を発見した。そこで、石組み遺構を作成するために掘られたと考えられるピット1と、第1次調査で検出した長方形のピット2の掘り下げを行った。ピット1の掘り下げを行ったところ、灰釉陶器片の口縁部が2点、古銭が1点出土した。灰釉陶器片は第1次調査でも出土していた渥美焼だと判断した。古銭は錆などにより文字の識別が難しい状態だが、中国宋代紹聖元年（1094年）に始鑄された「紹聖元寶」であると考えられる。



写真9 宋銭写真

現地説明会の際には唐銭「乾元重寶」としたが訂正をしておきたい。ピット2内から出土遺物はなく、末期古墳の埋葬部の想定は実証できなかった。

以上の調査結果から、1号塚の表面は12世紀後半の経塚が営まれていたことが判明した。渥美焼は奥州藤原氏関連経塚等でしばしば使われるもので、これにより鳥矢ヶ崎の地が奥州藤原氏と深い関係にあった可能性が考えられる。

墳丘上面で見ていた長方形のピット2は、経塚よりも下層であり、平安時代末以前に掘られたことは確実だが、時期を特定できる遺物は出土しなかった。古墳の埋葬部とは異なる様相であり、当初の末期古墳の埋葬部という想定を裏付けることはできなかった。

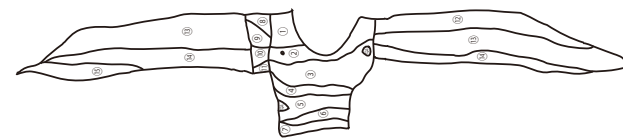


写真10 1号塚ピット1, 2掘り上げ写真



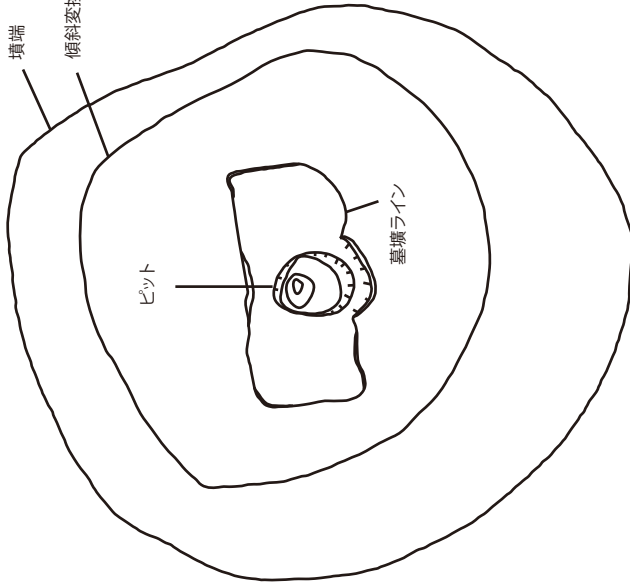
┆

┆



┆

東西セクション北壁



┆

┆



┆



┆

┆

南北セクション西壁

土層	粘性	しまり	粒度
① hue 7.5YR 明褐 5/8	中	弱	シルト
② hue 10YR 黄褐 5/8	中	弱	シルト
③ hue 7.5YR 明褐 5/8	中	弱	シルト
④ hue 10YR 褐 4/6	中	弱	シルト
⑤ hue 7.5YR 褐 6/8	中	弱	シルト
⑥ hue 10YR 褐 4/4	中	弱	シルト
⑦ hue 10YR 明黄褐 7/4	中	弱	シルト
⑧ hue 10YR 褐 4/6	中	弱	シルト
⑨ hue 7.5YR 明褐 5/6	中	弱	シルト
⑩ hue 10YR 黄褐 5/8	中	弱	シルト
⑪ hue 7.5YR 明褐 5/8	中	弱	シルト
⑫ hue 7.5YR 明褐 5/8	中	弱	シルト
⑬ hue 10YR 黄褐 5/6	中	弱	シルト
⑭ hue 10YR 褐 4/4	中	弱	シルト
⑮ hue 10YR 黄褐 5/6	中	弱	シルト
⑯ hue 10YR 褐 5/6	中	弱	シルト

第8図 1号塚下層遺構平面図

2. 2号塚

2号塚は直径約7m、高さ約1mの円形状の塚である。2号塚の発掘調査では、塚の様子を確認するため、トレンチ設定を行い表土（腐植土）を除去した。トレンチの設定は、墳丘を30cm幅の畔を十字に残して4分割し、北西側から逆時計回りにA、B、C、D区とした。東西南北のラインは1号塚と対応させており、1号塚と2号塚の中心部を通るように南北のラインが引かれている。



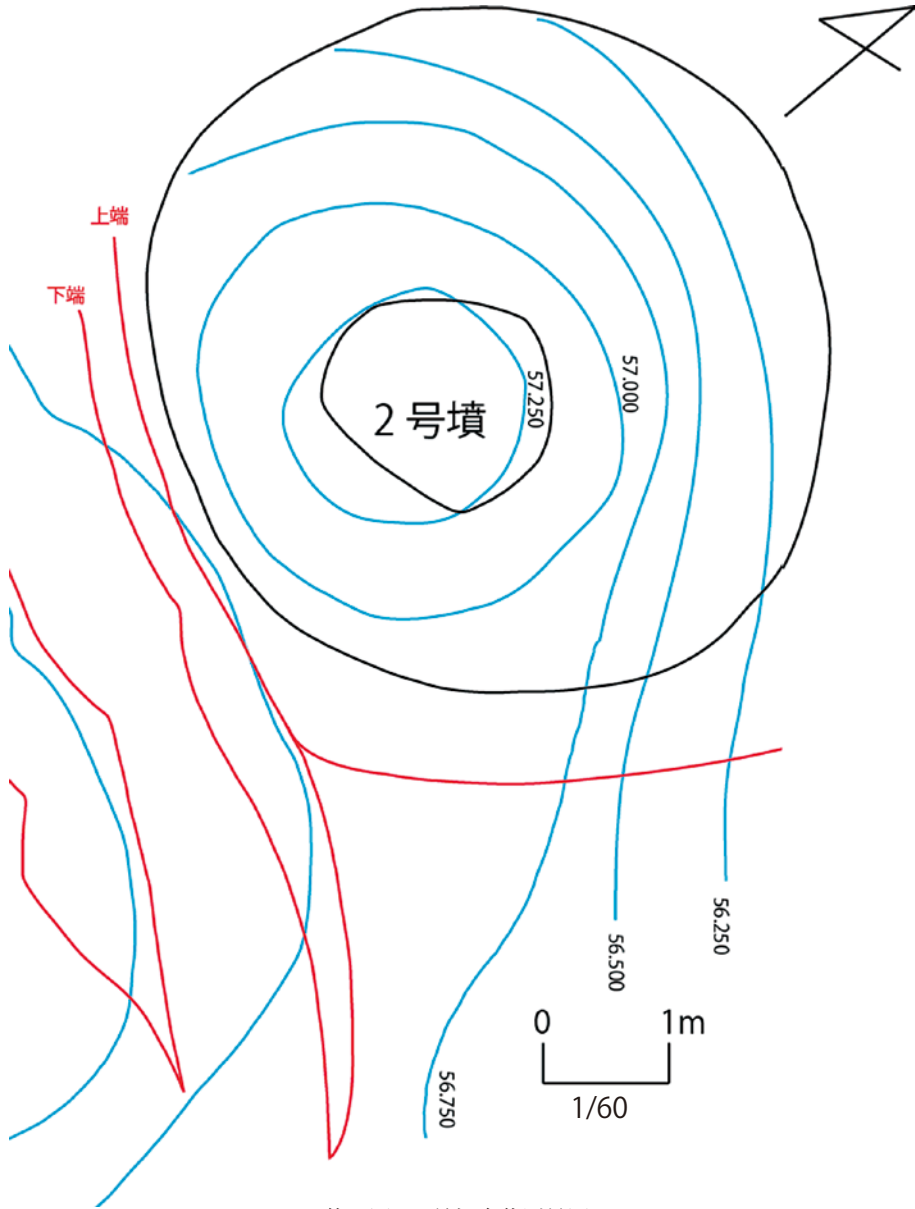
写真11 永楽通宝

1号塚の調査において、表土を除去した時点で黄色い土が検出され、これが塚の上面であると考えられていた。2号塚も同様であると考えられたため、黄色い土が検出されるまで掘り下げを行った。表土の除去以前より、塚の上面に礫の集中が確認されていた。表土を除去した段階で、2号塚が傾斜面に土を積むことで作ったものであり、上面に小礫が敷かれていることがわかった。また、塚の上部は平坦であり、周囲はややくぼむものの、周壕がないことが確認された。畔を取り外し、表面の小礫を含む層を取り外したところ、塚の中心部でピットの輪郭が確認された。その後、塚の上部より平坦に30cm程掘り下げを行った。掘り下げを終えた段階で、中央部に1m四方で色の違う土を確認した。除去した礫混じりの層からは「永楽通宝」1枚が出土した。

中央部で確認された色の違う土を4つの区画に分けA側を1、B側を2、C側を3、D側を4として、区画ごとに掘り下げを行った。1区の掘り下げを行い、地山と思われるオレンジ色の土が確認できたため、他も同様にオレンジ色の土が確認できるまで掘り下げを行った。

その後、塚の構造を明らかにするため、塚全体を十字に断ち割るように、東西南北に30cm幅のサブトレンチを設定して掘り下げを行い、地山に到達した。

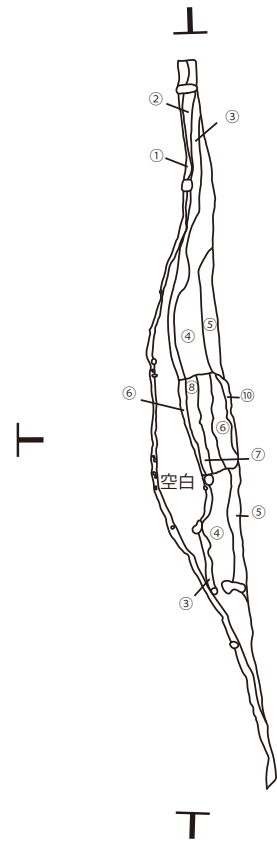
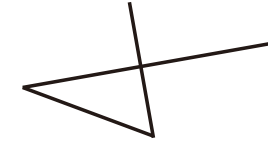
(鈴木舞香)



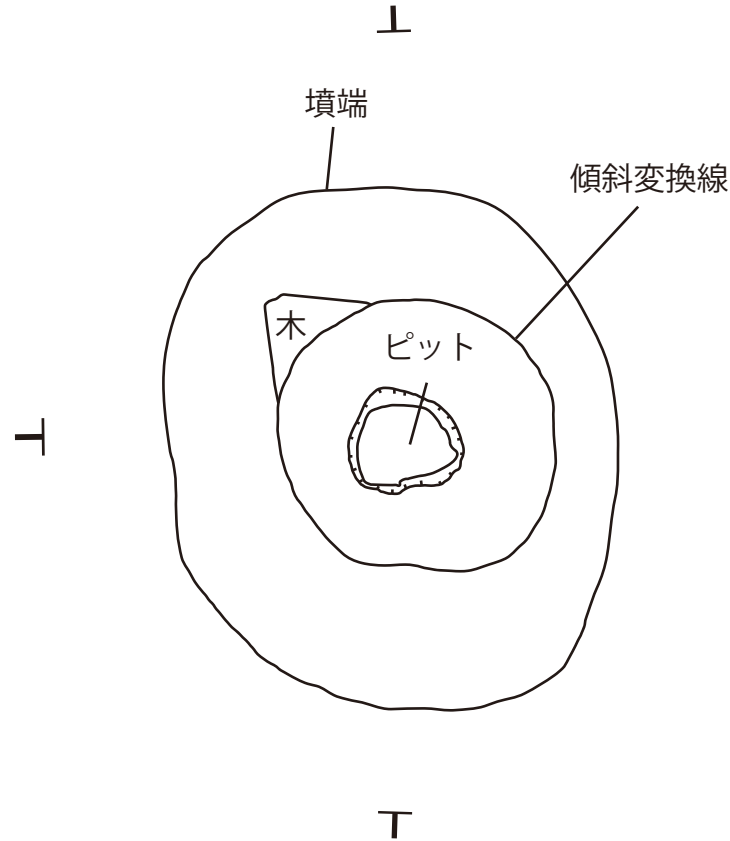
第9図 2号塚全体測量図



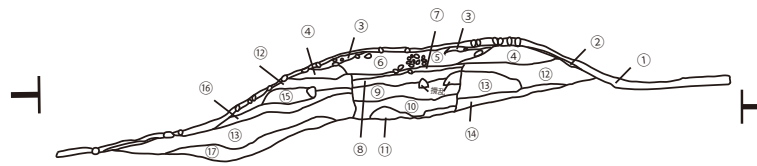
写真12 2号塚掘りあげ状況



東西セクション北壁

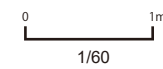


南北セクション西壁



南北セクション北壁						
層位			粘性	しまり	粒度	
①	Hue10YR	黒褐	2/3	弱	弱	シルト
②	Hue10YR	棕暗褐	2/3	弱	弱	シルト
③	Hue10YR	にぶい黄橙	6/3	弱	弱	シルト
④	Hue10YR	黄橙	5/6	弱	弱	シルト
⑤	Hue10YR	褐	4/6	弱	弱	シルト
⑥	Hue10YR	黄褐	5/8	弱	弱	シルト
⑦	Hue7.5YR	褐	4/6	弱	弱	シルト
⑧	Hue10YR	褐	4/6	弱	弱	シルト
⑨	Hue10YR	黄褐	5/6	弱	弱	シルト
⑩	Hue10YR	褐	4/4	弱	弱	シルト
⑪	Hue10YR	黄褐	5/8	弱	弱	シルト
⑫	Hue10YR	褐	4/4	弱	弱	シルト
⑬	Hue10YR	褐	4/6	弱	弱	シルト
⑭	Hue10YR	暗褐	3/4	弱	弱	シルト
⑮	Hue10YR	黄褐	5/6	弱	弱	シルト
⑯	Hue10YR	にぶい黄褐	4/3	弱	弱	シルト
⑰	Hue10YR	にぶい黄褐	6/4	弱	弱	シルト

東西セクション北壁					
層位			粘性	しまり	粒度
①	Hue10YR	2/3	弱	弱	シルト
②	Hue10YR	2/3	弱	弱	シルト
③	Hue10YR	4/4	弱	弱	シルト
④	Hue10YR	4/6	弱	弱	シルト
⑤	Hue10YR	3/4	弱	弱	シルト
⑥	Hue7.5YR	4/6	弱	弱	シルト
⑦	Hue10YR	4/6	弱	弱	シルト
⑧	Hue10YR	5/6	弱	弱	シルト
⑨	Hue10YR	4/4	弱	弱	シルト
⑩	Hue10YR	5/8	弱	弱	シルト



第10図 2号塚 全体図

3. 3号塚

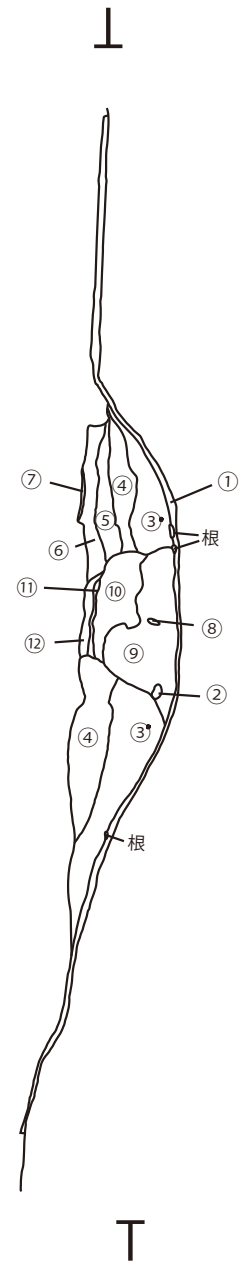
3号塚は南北に延びる尾根線上に築かれた円形の塚である。直径約4m、高さ1mの円形状の塚あり、第2次調査から掘り下げを開始した。

3号塚では、周濠の有無の確認や、古墳墳丘・周濠外の様子を観察するため、トレンチ設定し、表土（腐植土）の除去を行なった。トレンチは、墳丘を30cm幅の畦を十字に残して四分割し、北側から逆時計周りにa、b、c、d区とした。墳丘上で黄褐色の土が検出され、墳丘の上面であると考えられた。墳丘下部から、その外周では褐色の均質な土層が広がり、地山面であると判断された。表土を除去したところ、塚の周辺に周溝は見られず、墳丘の大半が人工的な盛り土によるものであることがわかった。墳丘上面をやや掘り下げたところ、墳丘中央部に黒色の土が見られた。除去したところ約1m四方、深さ50cm程度のピット状の落ち込みが確認できた。その後、墳丘全体を十字に断ち割り、墳丘構造の調査を行った結果、墳丘の下に浅い掘り込みが確認できた。この掘り込みは墳丘構築に先立ち、表土を剥ぎ、地山を削るなど整地が行われたためのものと考えられる。

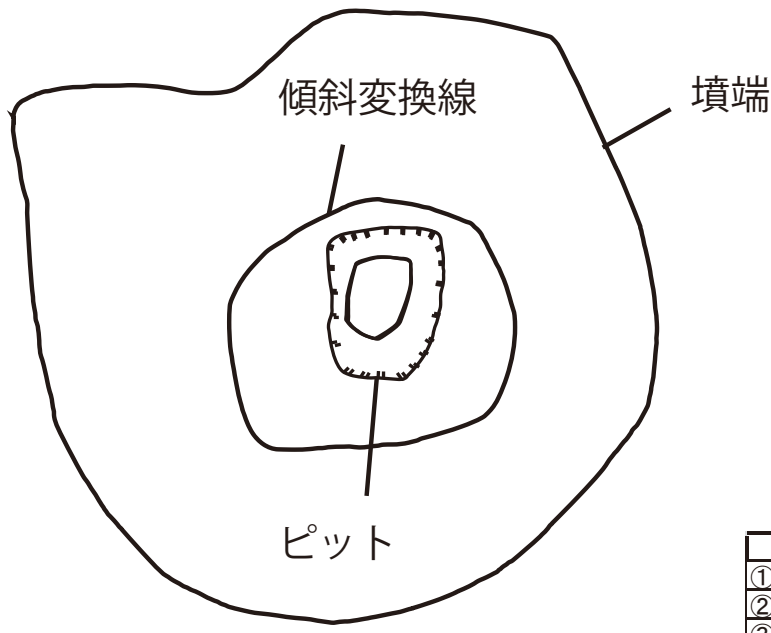
(石山朋美)



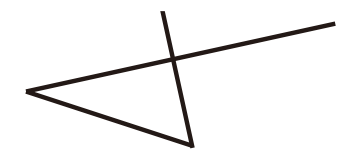
第11図 3号塚全体測量図



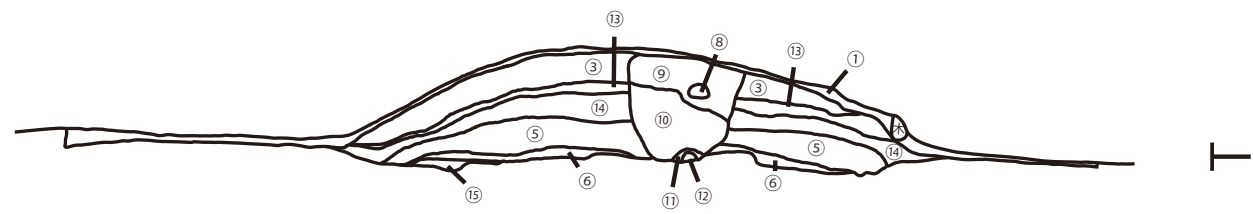
東西セクション北壁



0 1m
1/60



	土層	粘性	しまり	粒度	備考
①	Hue7.5YR 2/3極暗褐	弱	弱	シルト	表土
②	Hue7.5YR 5/8明褐	弱	弱	シルト	単色・均質(ブロック)
③	Hue10YR 5/6黄褐	弱	弱	シルト	墳丘形成土
④	Hue10YR 4/6褐	弱	弱	シルト	粘性あり
⑤	Hue10YR 4/6褐	弱	弱	シルト	④と比べ粘性なし
⑥	Hue10YR 4/4褐	弱	弱	シルト	
⑦	Hue5YR 5/8明赤褐	中	中	シルト	地山
⑧	Hue10YR 4/6褐	弱	弱	シルト	ピット埋土
⑨	Hue10YR 5/6黄褐	弱	弱	シルト	ピット埋土
⑩	Hue10YR 5/6黄褐	弱	弱	シルト	⑨よりしまりが強い(粘土ブロック)
⑪	Hue10YR 5/8黄褐	弱	弱	シルト	ピット埋土
⑫	Hue10YR 4/6褐	弱	弱	シルト	ピット埋土
⑬	Hue10YR 5/8黄褐	弱	弱	シルト	
⑭	Hue10YR 5/6黄褐	弱	弱	シルト	③より粘性がやや強い
⑮	Hue7.5YR 4/4褐	中	中	シルト	地山



南北セクション西壁



写真13 3号塚ピット検出状況



写真14 3号塚 掘りあげ状況

ま と め

2015年から2016年の2年間にわたって青雲神社東側の丘陵上に分布する3基の墳丘の調査を実施した。調査を開始するときは、これらは県指定史跡鳥矢ヶ崎古墳群と同じ終末期古墳群の一部で、鳥矢ヶ崎古墳群の分布がこの場所まで広がっているのではないかと考えていた。しかし、調査の結果墳丘は古代のものだという確証は得られなかった。

一方、これらの墳丘には古墳とは違う歴史的な意味があることが判明した。

1号塚では墳丘が経塚として利用されていることが分かった。残念ながら後世に攪乱されているため、埋納されたはずの写経されたお経やその容器は本来の姿では発見されなかったが、墳丘上にお経を入れる容器として利用された壺の破片が発見された。八重樫忠郎氏のご教示により、この壺は渥美焼であることが分かった。渥美焼の壺は奥州平泉でしばしば経塚でお経をいれる容器として使われていることが知られている。渥美焼の年代は12世紀後半、藤原秀衡の時代にあたる。この渥美焼の壺は源頼朝が奥州平泉を攻める直前の時代に、この鳥矢ヶ崎の地が奥州平泉の文化を持っていた、ひいては平泉の勢力と関係を結んでいたことを示す大変重要な資料である。この経塚を作るときに中国宋代に铸造された銭「紹聖元寶」が埋められていることも新しい発見で、経塚を考える上で重要な材料を提供するものと思われる。

2号塚は、調査前には1号と同様の経塚の可能性が考えられていたが、調査の結果経塚として使われた証拠はなかった。墳丘の上面から小型の穴が掘りこまれていることがわかった。おそらく墓として使われたのではないかと考えられる。墳丘上から「永楽通宝」が発見された。「永楽通宝」は室町時代から江戸時代初期に多く使われたが、江戸時代の初期には使用が禁じられた銭貨である。実際には江戸時代にも使われてはいるが、ここでは最も多く使われた室町時代を考えておきたい。2号塚は室町時代またはそれ以前の時期と考えられる。

3号塚は新たに発見されたものである。調査の結果、2号塚と同様に墳頂から穴が掘られていることが分かった。2号塚ときわめて良く似ているので、2号塚と同じく室町時代またはそれ以前と考えておきたい。

以上述べてきたように青雲神社東側の丘陵部分には3基の塚が確認された。うち1号塚は経塚として利用されているが、本来は中央部に長方形の穴が掘られた塚であったと考えられる。2、3号塚も中央に長形状の穴が掘られた塚で、築造の時期等の詳細は知り得ない。その性格も決めたいが古代、中世の墳墓である可能性も考えておきたい。

ところで、青雲神社西側には2基の板碑がある。佐藤信行氏、佐々木繁喜氏によって紹介され、14世紀から15世紀頃と考えられている（佐藤、佐々木 2011）。また、青雲神社の東西には南から北に伸びる丘陵がある。東側の丘陵には今回の調査で3基の塚があることが判明した。時期は確定できないが、墓であるかどうかは別にして、古代、中世の信

仰に関わる遺構である可能性は高い。一方、西側丘陵上には、三つの塚が連なって築かれている。これらも東の丘陵上の3基と近い性質の塚である可能性は高いと思われる。また、東西の丘陵の間には南側の湧水地点から流れ出る水をたたえた池が南北に二つ連なっており、池の周囲には平場も観察される。

このような状況を総合すると、青雲神社周囲は古代中世から現代にいたるまで、長い時間にわたって信仰の場所として機能していた可能性が高い。また、池の存在も合わせ考えると、浄土庭園が存在した可能性もあながち否定はできないように思われる。

2年間の調査の結果、青雲神社東側の丘陵上は古代末から室町時代にかけて、地域の人々に神聖な信仰の場所として使われていたことが判明した。青雲神社周囲に残る塚群、板碑等も含む総合的な検討により、この地の信仰の姿が解明されることを期待している。

引用文献

佐藤信行・佐々木繁喜 2011 「宮城県三迫川流域の溶結凝灰岩板碑群」『宮城考古学』第13号

謝辞

調査終了にあたり、ご神域の調査ご許可くださいました青雲神社宮司佐藤伸成氏、総代長菅原勁氏、山本政広氏、調査実施にあたり、ご支援をいただいた佐藤茂会長をはじめとする鳥矢ヶ崎史跡公園保存会の皆様、宿舎をご提供いただいた工藤健委員長をはじめとする猿飛来コミュニティセンター運営委員会の皆様、調査を支えていただいた栗原市教育委員会の皆様に心から御礼を申し上げます。



写真 15 現地説明会